

大和地域の庶民教育の実態 —寺子屋・私塾の事例を中心として—

梅 村 佳 代

(奈良教育大学教育学教室)

(平成7年4月28日受理)

はじめに

本稿の目的は、大和地域における庶民教育の実態の概要について、『日本教育史資料』（以下『史資料』と略す）によって寺子屋・私塾の開業状態と概要及び大和国の地方史誌類に把握された庶民教育の状況、教科書などの概要を把握することにある。一般的に、庶民が文字習得のために必要とした寺子屋が設立されてくるのは江戸時代初期とされているが、庶民の多数の子どもが手習い・読書・計算能力などの獲得のため、一定期間就学をして持続的な学習に従事することが一般的になったのは、幕末期ころであった。とくに幕末期の寺子屋は、農民のおとなが農民の子どもを教える状況が普遍的に成立してきた。つまり、江戸時代初期や中期には、寺子屋の師匠は僧侶や神官や医者・浪人など、村の知識人層による兼業として行われていたのであり、それだけに学ぶ子どもの数も多くはなかった。しかし庶民の文字学習への欲求と需要は高まり、幕末期には、爆発的な高揚を示すことにより、庶民のおとなで文字を習得した者が村や町で庶民の子ども達を集めて、手習いを中心とした読み・書き・算術の教授をする状況が広汎に展開する事となった。その場合、束修や謝儀つまり入門料や月謝を子どもから徴収して、師匠の生活の糧とすることが可能となり、寺子屋経営が稼業としても一般的に成立してきたのである。即ち専業の寺子屋師匠が存在したのである。他方、学習者である子どもは6・7歳ころになると村や町で近所の寺子屋に就学して3～4年ほど師匠の個人手ほどきを受け、「いろは」、地名・人名・国名・単語などを順次学習し、続けて日常必要な手紙文の雛型の練習、用文章の練習を経て、「商賈往来」や「百姓往来」「自遣往来」（「江戸往来」）などの往来物をテキストとして、読みと手習いを兼ねて学習するとともに地理や歴史などの教養もあわせて習得していたのであった。そして少なくとも12～13歳ころまでにはひととおり基礎的な学習を修了して、百姓として村に残って稼業である農業に従事するか、あるいは他国へ奉公稼ぎに、または年季奉公のために家を離れたのである。またその頃から師匠の側にとっても、子どもの確実な把握が必要とされ、寺子屋の「門人帳」「入門帳」などが成立してきた。このように庶民の文字学習が一般的に成立してきた背景には幕府や藩による干渉がなかったことがあるが、江戸時代になると庶民の文字や計算に対する生業的な需要と子どもの成長への関心が高まったことにある。近年の研究動向では、江戸時代の町や村の庶民の子どもが自分の住む家の近所で文字学習をおこなった学習所を手習塾・手習所と名付け、子どもの手習所の起源とされる寺院教育の場である寺小屋と区別し、近世の庶民の手習いの施設である寺子屋とも区分することが提唱されている。本稿では「寺子屋」を使用するが、江戸時代の文字学習所は中世の寺院教育とは異なった庶民の手習い・学習をする子どもである「寺子」が通う学習所の意味において使っている。手習塾・手習所と同義である。学習所の名称については

別途考察したいのでここでは「寺子屋」を使用した。

I 『日本教育史資料』にみる大和地域の寺子屋・私塾

1. 『日本教育史資料』の批判的検討

幕末期の寺子屋の存在を知るための基本的な史料は、現在のところ文部省編『史資料』⁽¹⁾であることに変わりはない。しかし近年の教育史研究において『史資料』の史料批判がなされており⁽²⁾、各府県から報告された寺子屋・私塾の数において必ずしも実態に相応しているとはいいがたいことが明らかにされつつある⁽³⁾。しかしこの事実も、「学制」百年を記念した各府県教育史の編纂事業のなかで、現時点であらためて調査された結果、あきらかにされたことであり、さらに各地の市町村史誌の編纂により今後一層、寺子屋の数のみならず庶民教育の実態面が明らかになってくることが予測される⁽⁴⁾。現状では『史資料』の寺子屋数を数倍上回る数の寺子屋数が幕末期に存在していたことが推測されていることを指摘しておく。また近年、津田秀夫・石川松太郎監修『都道府県教育史シリーズ』全47巻においては近世社会における教育の究明を重点とした地域教育史の研究がはじまっており、寺子屋・私塾・藩校・郷校など教育機関のみを分散的に検討するのではなく、幕藩体制のもとにおける武家や庶民の生活や統治、主体形成など近世社会を総体として把握するなかで教育・学習活動の成立とその実態の究明をするとともにその歴史的意義を明らかにしようとして試みられている⁽⁵⁾。別表(1)は寺子屋数に関する『史資料』による全国一覧と別表(2)は各府県教育史及び『各都道府県教育史シリーズ』において明らかとなった寺子屋数一覧である。明治16年段階で文部省が把握した全国の悉皆調査による寺子屋数は15,900余である。寺子屋と私塾の区分の根拠も必ずしも明確ではない事、各府県に達されて取り調べられ報告

表(1) 『日本教育史資料』にみる各府県別私塾・寺子屋数

府 県 名	私塾数	寺子屋数	府 県 名	私塾数	寺子屋数	府 県 名	私塾数	寺子屋数
東 京 府	123	488	山 梨 県	22	254	岡 山 県	144	1,031
京 都 府	34	566	滋 賀 県	8	450	広 島 県	65	257
大 阪 府	20	779	岐 阜 県	28	754	山 口 県	106	1,304
(うち旧奈良県分)	(2)	(311)	長 野 県	125	1,341	和 歌 山 県	3	294
神 奈 川 県	11	507	宮 城 県	52	567	徳 島 県	37	432
兵 庫 県	52	819	福 島 県	19	281	高 知 県	10	217
長 崎 県	51	188	青 森 県	8	456	福 岡 県	50	160
函 館 県	記載なし	48	山 形 県	6	63	大 分 県	92	482
新 潟 県	27	63	秋 田 県	66	249	佐 賀 県	7	27
群 馬 県	39	55	福 井 県	23	31	熊 本 県	45	910
千 葉 県	52	107	石 川 県	22	190	宮 崎 県	6	9
栃 木 県	19	86	富 山 県	4	17	鹿 児 島 県	1	19
三 重 県	4	115	鳥 取 県	4	312			
愛 知 県	43	976	島 根 県	73	675	合 計	1,507	15,915
静 岡 県	4	25						

『日本教育史資料』第八巻より作成。愛媛・岩手・沖縄・茨城・埼玉・香川県を欠く

された庶民教育の実態が悉く掲載されているのか否か、欠落府県が存在など検討すべき課題は多くある。寺子屋の数に限っても『史資料』の批判的検討は必要である。しかしながら現状では『史資料』に把握された実態が唯一の全体状況を知り得る史料であり貴重なデータであることも確かなことである。また最近、歴史学の近世史研究において民衆の識字率や文字学習実態への関心が江戸時代研究や江戸時代文化及び幕末の情報伝達への関心とともに高まっている⁽⁶⁾。近世社会の手習所や手習塾・寺子屋における庶民の文字学習の爆発的な隆盛の事実を筆者は幕末から近代社会への移行期の民衆の危機の結果と把握してきたが、それは民衆が文字や計算能力を獲得することによる主体的成長により生活圏の広がりや高度の情報に接することを可能とし、幕末状況にある近世的共同体と秩序を新たな認識で把握することも可能にさせる。また新たな社会編成を明治維新として迎えるなかで庶民の側の内的な成長は近代公教育としての学校編成の主体的な準備としても看過できない課題でもある。

表(2) 『日本教育史資料』にみる各府県の私塾・寺子屋数と現在判明している寺子屋との比較

府 県 名	日本教育史資料		現在判明している寺子屋数
	私 塾	寺子屋	
京 都 府	34	566	593
長 崎 県	51	188	282
栃 木 県	19	86	449
三 重 県	4	115	709
愛 知 県	43	976	4,090
青 森 県	8	456	852
福 井 県	23	31	440
富 山 県	4	17	509
島 根 県	73	675	822
徳 島 県	37	432	434
福 岡 県	50	160	218
大 分 県	92	482	746
愛 媛 県	記載なし	記載なし	1,044
岩 手 県	記載なし	記載なし	1,052
山 形 県	6	63	私 塾 435 寺子屋 792

『日本教育史資料』の第八巻。愛知県と三重県は県教育史、山形県は『山形県教育史編』第10号。その他の県は『都道府県教育史シリーズ』(全47巻)中より作成。

2. 『日本教育史資料』大阪府報告にある大和地域の寺子屋・私塾

『史資料』によれば、大和地域（奈良県）からの寺子屋・私塾の報告はなかったとされてきた。現に『史資料』掲載の各府県からの私塾・寺子屋一覧報告の目次には「奈良県」報告の掲載はない。従って明治16年段階の文部省による指示に基づく奈良県報告がないのは何故か、などについて筆者は関心をもっていたのであり、寺子屋・私塾研究史の上でも大和地域（奈良県）は実態把握のうえでは未開拓地とされてきた。しかし、大和地域（奈良県）についての寺子屋・私塾の実態が『史資料』からわかることが判明した。すなわち、奈良県報告ではなく「大阪府」報告として、大阪府管轄下にあった旧奈良県下地域の事例を含めて報告されている⁽⁷⁾。明治16年、文部省の指示により旧教育施設・機関の調査がなされて『日本教育史資料』として報告書が作成された時、奈良地域は大阪府の管轄下にあった。したがって「大阪府報告」の後半部に奈良地域15郡の実態報告がなされている。その15郡とは添下郡（『史資料』では添下郡となっている）添下郡、山邊郡、廣瀬郡、平群郡、式上郡、式下郡、十市郡、宇陀郡、高市郡、葛上郡、葛下郡、忍海郡、宇智郡、吉野郡、であり、この順序で記載されている。いずれも奈良県、大和地域内の郡名である⁽⁸⁾。

では何故、現在まで大和地域の寺子屋・私塾の実態調査が奈良県ではなく大阪府報告としてなされていた事実が一般的に知られていなかったのでしょうか。昭和60年3月25日から発刊された『奈良県史』には「教育編」はなく⁽⁹⁾、奈良県教育委員会編『奈良県教育八十年史』及び奈良県教育百年史編纂委員会編『奈良県教育百年史』は「学制」頒布80年、及び100年を記念して編纂

されているが、双方とも「学制」頒布を起点として奈良県教育の発達過程が叙述されていて、「学制」以前の教育について、高い関心があったとはいえない。近年になって漸く近代の学校教育の発展の民衆の基盤として幕末の庶民教育の発展と庶民の識字力、庶民の子どもへの関心が高まってきた。そのなかで文字学習や出産・育児と通過儀礼を含む子育て様式の総体に関心がむけられたことにより寺子屋・私塾での学習実態や学習内容にもさらに目が届き始めたところである。また『史資料』をもとにした各県の実情や教育実態を統計的・数量的な把握を通して地域の特質をとらえる試みをしている野村知男による奈良県の教育実態把握においても、大和国各藩の藩校のみの分析に止まり、寺子屋・私塾についてはとりあげられていない⁽¹⁰⁾。

以上からみて大和地域史、奈良県史、奈良県教育史、教育史研究において大和（奈良）地域の寺子屋の実態について顧みられることが少なかったことによる事情と推定できる。しかし大和地域の寺子屋に関する先行研究は、全く皆無ではない。1990年3月、樫根逸子「近世寺子屋の研究—大和国葛下郡王子村「大章堂」の門人帳を中心とした考察—」がある。この論文では『史資料』の大和府報告にある大和地域に着目し、葛下郡内の記載22例を調査して、8事例の寺子屋の確認がなされ、石碑により文人の存在を確認している。また寺子屋跡、手習い道具、寺子屋の手習い子の落書きの発見とともに、『史資料』所収の王子村の寺子屋「大章堂」の谷村祐斎の事績をとらえ、大章堂門人帳による寺子屋の実態分析がなされている⁽¹¹⁾。

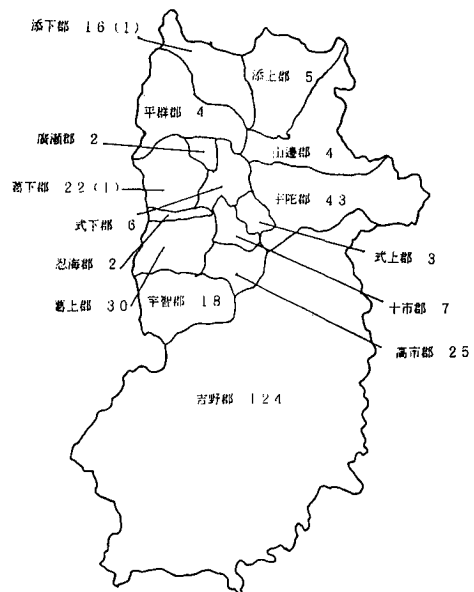
3. 大和国の寺子屋・私塾の実態概要

前述したように、大和国15郡とは添上郡、添下郡、平群郡、山邊郡、式上郡、式下郡、十市郡、廣瀬郡、葛上郡、葛下郡、忍海郡、高市郡、宇陀郡、宇智郡、吉野郡である。明治23年から27年にかけて調査した大和国地誌『大和志料』によれば大和国で最も町村数の多いのは、添上郡179、ついで吉野郡35、山邊郡32、続いて高市郡21、式上郡19、葛上郡18で、最も少ないのは忍海郡5、続いて宇智郡6であり、大和国全体の町村数は15郡414町村であるが圧倒的に大和国北辺添上郡・山邊郡に町村が密集している。大和国の寺子屋の数は、総数が311であり、私塾数は2である。その地域分布図が別表（3）である。寺子屋数の最も多いのは吉野郡124、次いで多いのが宇陀郡43であり、続いて葛上郡30、葛下郡22、高市郡25で大和国の町村数の多い地域ではない中南部に寺子屋が数多く広がっている。

明治16年から23年頃に調査されたものであるが、かなり寺子屋開業数に地域的な差異が認められる。たとえば吉野郡の寺子屋開業数が124であり、大和国全体の寺子屋報告数の40%弱を占めているとともに、添上郡は奈良地市域を含む地域でありながら5寺子屋とは少なすぎる数字である。添上郡は興福寺領・東大寺領・春日神領などの寺社領及

表(3) 大和国私塾・寺子屋の分布

() 内は私塾



『日本教育史資料』第八巻 大和府報告より作成

び貴族の所領が多くあり幕府や藩の支配地は60%未満であった。幕末から維新をへた明治16年ころの奈良の寺社領の動向を把握することも必要である。別表(4)は、寺子屋開業年代からとらえた大和国寺子屋の実態を示したものである。寺子屋開業数の上から優位を占める吉野郡は、開業年代において、17世紀中葉ころから、連続して開業がみられ、最も早いものは寛永16年(1639)に既に開業が確認されていて他の郡地域よりもほぼ1世紀から2世紀ほど早くから開業されていたことがわかる。吉野郡に続く高市郡では明和4年(1768)と寛政元年(1789)に開業されているが、この時期でも大和国の他の地域はまだ判明していない。ようやく19世紀の初期の文化・文政期に葛下・添下・式下・宇陀各郡の開業が散見できるのであり、本格的には、天保期から明治期に寺子屋開業熱の高揚があったと言えよう。全国的の寺子屋開業趨勢から寛政期から始まり天保期に隆盛をみる幕末期の爆発的な寺子屋開業熱がとらえられているが、大和国の事例からは、社会の近代化に向かう新たな編成過程で民衆の文字獲得・学習熱の爆発の傾向は認められるが、その強さや速度においては慎重であるともいえようか。特筆すべきは吉野郡の開業趨勢にみる早い時期から学問・教育熱の高まりと持続力がみられることである。

『史資料』の寺子屋廃業からみた大和国の実態をとらえると寺子屋廃業が明治期にはいつ頃から慌ただしくおこなわれた様子が看取できる。とりわけ明治5年(1872)に集中的に122もの寺子屋が廃業になっているのは、明治政府による「学制」の公布があり、新たに近代の小学校が組織化されることが指令として出されたからである。小学校の設立が具体的になってくるのは明治7年ころからであるから、明治5年の「学制」公布とともに徐々に廃止されていくことも可能であったが、明治政府による新しい学校設立の条件整備として「学制」公布に先だって「旧学校悉皆廃止之事」の指令が奈良県においても出され徹底されたことが推測される。またその場合近世庶民の私的な文字学習機関である寺子屋も旧藩学校、県学校、義塾、私塾、家塾とともに同様に廃止の対象とされたといえる。

幕末から明治初年の「学制」頒布以前の大和地域には少なくとも319名の寺子屋師匠が存在し、7,500名余の男児と3,400名余の女児が存在していた事、大和地域に10,900名余の子どもが学習していた実態が存在していたのである。また師匠ひとりに対する寺子数は葛上・葛下郡のように実態が判明しがたい状況にあるが、一人の師匠におよそ30人程度の子どもが手習いや算術の学習をしていたのであろう。また男師匠1人が開業する寺子屋の型がほとんどである。私宅を開放して寺子屋を開業していた様子が伺われる。吉野郡、宇陀郡、式下郡で数は少ないが複数の男師匠をもつ寺子屋が存在している。女師匠も1人のみ確認されている。しかし女師匠はいなかったわけではなく女児を入門させている寺子屋では夫婦で師匠をしていることは一般的にも推測されている。男師匠のみを報告されている事例でも実態は夫婦でこどもの手習いや礼儀、稽古事を教えていたともいえるので女師匠は統計実態より多かったと推測しうる。また子どもの数からみた寺子屋の実態は全体にたいする女児比率が31%を占めていたことは、明治20年ころまでの近代小学校への女児就学者の比率とともに注目しておく必要がある。近代小学校への女児就学は当初は高くなかったのである。

別表(5)は師匠身分からみた大和国寺子屋の実態をみたものである。全体の35%が僧侶による師匠で14%が農民師匠である。不明の23%が加われば傾向がかわることもありうるので断定はできないが、僧侶師匠の比重が高い傾向は認められる。逆に全国比率より農民師匠が少ないといえる。全国的な傾向は僧侶や医師など兼業の師匠による寺子屋経営を凌駕して、幕末期には農民的寺子屋の開業・経営を爆発的に増加させる傾向であるが、大和地域は僧侶師匠が支配的である

文政11																		3	3
12(1829)								1										1	2
天保元(1830)																		2	2
2								1										2	3
3																			
4		2																1	3
5 (1834)			1	1			1	1										5	9
6			1							1								1	3
7		3														1			4
8																			
9																			
10(1839)																		2	2
11																			
12																		1	1
13										1								1	2
14(1843)																			
弘化元(1844)		1						1		1						2	3		8
2		1					1	1	1								3		7
3	1					1						1							3
4 (1847)					1		1												2
嘉永元(1848)					3		1											3	7
2	1	2							1			1							5
3			1							1		1					2		5
4		1					1		1										3
5												1							1
6 (1853)						1		1					1				2		5
安政元(1854)		1	1	1					1		1					3	4		12
2		1							3							1	3		8
3									2		1								3
4																	2		2
5									2								2		4
6 (1859)												1					1		2
万延元(1860)									3								3		6
文久元(1861)								2	4		1	2					3		12
2											1		1				1		3
3									4	2						1	4		11
元治元(1864)								1	2	1	2	1				1	3		11
慶応元(1865)		1							3	1		1				2	6		14
2		1				1			3		2	2				1	1		11
3 (1867)									1			1				1	1		4
明治元(1868)									1	2	2	1					4		10
2									2	1		1				1	2		7
3											2	1				1			4
4									1		1						1		3
5 (1872)																			
不明	3								5	10	17	6				3	17		61
合計	5	16	4	2	4	3	6	7	43	25	30	22	2		18	124			311

学習所がひろく広がっていたとも考えられる。

『史資料』による寺子屋総数からみた寺子屋規模による大和地域の傾向をみると、男女児併せてみた入門総数による寺子屋規模別比較をした場合、最も多かったのが10人以上20人未満規模の寺子屋であった。続いて20人以上30人未満の寺子屋規模であり、50人未満規模の寺子屋が164事例で52%を占めている。全体として小規模寺子屋といえるが、全国の傾向と合致する。しかし看過できないことは100人以上150人未満の規模の寺子屋が26事例存在していることや、100人以上の規模の寺子屋の数が全体の10%をしめる32事例あったことである。

別表(7)は入門した男女児別に検討した場合の傾向を示したものである。男児数のみの規模でみれば10人から40人未満に集中しているが、女児数による規模が表(7)から見る限り、10人未満に集中し、女児全体からみると20人未満に集中している為に、総数でみると20人未満の寺子屋規模数が多い結果となっている。「読書・算術」型の寺子屋経営を支えていたのは男児中心の学習施設であり、女児はより小規模である。女児は裁縫のような実学、礼儀作法などのしつけ、琴や三味線などの芸能の稽古事などとあわせて習得すべき学習文化体系ともいべき学習圏のなかで育てられていたと考えられる。そうしたことも文化における男女の差異により、女児は家庭でのしつけ教育や芸事の稽古と併せて文字や計算力を習得するために、寺子屋へ入門して「読書」「算術」「習字」の各種の基本的な学習を女子用のテキストにより学習していた。庶民の女児も男児とは別の学習文化体系に育まれて大人への準備がなされた。

II 文献資料にみる大和国の寺子屋・私塾の実態

1. 大和国地方史誌類にみる寺子屋・私塾の概要

近代の奈良県下において発刊された地方史誌類は奈良県をはじめ県下の8郡10市38町村にわたる200余の種類に及んでいる⁽¹²⁾。その地方史誌類には『日本教育史資料』に把握されている寺子屋・私塾以外の実態が把握されている。これらは村の伝承もあろうし古記録によるものもあるであろう。寺子屋と私塾、寺院教育も兼ねて把握されているが、とにかく村のこどもが通って習った学習所であったことは間違いない。

宇智郡二見村の松本敬次郎が明治5年6月に「五條御出庁」宛差し出した「奉上 書上之事」によれば明治4年に私塾を開業していた。師匠である松本敬次郎は26歳の青年で「元十五歳之時ヨリ阿州徳府城下大工町堤太助方ニ而五ケ年之間修学仕、其後明治壬辰五月高野山ニ住居 明治二巳六月紀州伊都郡平野村転居シ終明治四年未三月宇智郡二見村石井真之助稽古場跡恩地兵馬ヨリ譲リ受開塾仕候也」とあるように阿波国で5年間修業し、高野山、紀州伊都郡を経て明治4年宇智郡二見村に転居して私塾を開業している。学課は一等・二等の二等級にわかれ一等が上級、二等は初級である。一等生徒には素読として大学・中庸・論語並びに女大学・女今川・女実語経、習字手本として江戸往来・女仮名文章が使用され、算術はなく、講釈として孝経・小学、暗誦として心経・天神経・九九声・八算之割声が教えられた。二等生徒には素読として童子経・女大学、習字手本は奉公人請状、講釈として実語経、手習い手本としては商賈往来・日本国尽・村名・人名・改御高・郡付・伊呂波であった。塾規則は「一、稽古時之間ハ朝五ツ時ヨリ線香壺本之間□目手習教授並ニ手本之読声清書差□撰□」「一、昼帰宅之節者其当番致発声九九八算之割声、女者百人一首又女大学、女今川等替テ可読 又朔日十五日二十五日等者男女共心経、天神経等可奉読誦事」「一、昼後ヨリモ又然也 但九ツ時ヨリハツ時迄線香式本之間手習出精八ツ時線香壺本

之間総休息之事、又線香壺本半之間都素読之事、七ツ時帰館之節ハ小学教経替リテ講釈之事」とされ、私塾での稽古は朝は午前8時から線香1本の時間というから小1時間ほど手習いの手ほどきをうけ手本の読みと清書手本を選ぶ、さらに昼は帰宅するが当番のこどもが男児であれば九九、八算之割を読み上げる。女兒であれば女大学・女今川を読み上げる。また毎月1日・15日・25日は男女児とも心経・天神経を読み暗誦する。午後は正午から2時迄の線香2本分手習いに精を出し、午後3時までの1時間ほど皆で休息をする。それから1時間半ほど素読をするなど規則に則った学習生活がなされている。費用は「入費取立」によれば「入門式一朱位五節句祝儀老朱ヨリ式朱迄、但シ在方白米貳升」とあり入学費は1朱ほどで、五節句の祝儀は1朱より2朱までとされた。ただし村方のこどもは白米2升でもよいとされている。それに加えて稽古場の畳30畳の損失費用1ヶ年分を1人につき300文、家賃を1ヶ年2匁負担することと定められていた。稽古に通ったこどもの数は男児13人、女兒23人の併せて35人であった。この松本塾は村の子どもの達初歩的な手習いと読書・講釈・暗誦を行う30人規模の男女児を就学させた典型的な大和地域型といえるものである⁽¹³⁾。

また十市郡三輪村纏向地区の寺院において、織田地区芝村の美並作平・吉崎賢隆による子弟教育の存在、箸中地区の中川喜代文による会所での教育、大泉地区の福井佑右衛門、小西村の小坂某、三輪地区の大神神社社掌稲田某、馬場村の越主計、三輪村の安川源作、松之本の観音堂、上之庄村の浄福寺住職及び同村の松村蒔右衛門による寺子屋があったとされる。さらに明治5年7月16日には柳本専行院に柳本村以下18ヶ村の連合により元柳元藩士族を教師として私学校が設置され14歳までの有志子弟の就学が奨励されている⁽¹⁴⁾。同じく十市郡桜井村の浅古の八講堂（現在は廃寺）、魚市場西側の現在松村氏宅屋敷の寺子屋、天保5年に中尾喜助による男児63人、女兒55人の寺子屋、天保11年（『史資料』では15年）小川清六による男児24人、女兒21人の寺子屋、弘化2年には長沢伊七郎による男児28人女児22人の手習い、三輪裏道（現在の松原米穀店屋敷）、正覚寺横に九里（クノリ）兵庫（安政6年没）寺子屋など7件の寺子屋があったとされている。うち中尾・小川・長沢は『史資料』と重なる。また正覚寺裏には九里兵庫の筆子塚があり、この寺子屋では手習い手本として平仮名・いろは歌・口上文・手紙・国尽・商賣往来・女今川・庭訓往来が使われていたこと、男児には実語経・童子訓・古状揃三字経・四書五経・文撰が読書の教科書とされたこと、女兒には百人一首・女今川・女庭訓往来が教科書とされ、算術は「八算見」が学習され師匠九里兵庫の妻が裁縫を教えたこととある⁽¹⁵⁾。また十市郡脇本村の前川繁一宅にあたる場所で鈴木宗也なる人物が9歳以上のこどもを30～40人集めて男女児わけて心経・阿弥陀経・実語教・古状揃・商賣往来・百人一首・九九算などの手習いや算術を教え月謝を節句・八朔・七夕・名月など季節の変わり目に米一升・藩札2～3匁、七夕には米一升到西瓜を納めさせたこととされる。また上之宮村の森口甚太郎家は代々寺子屋師匠として、聖林寺・山田寺の住職並びに八井内・百市の住職も村の寺子屋師匠として村の子どもの手習いを教え、鹿路の住職常持某が鹿路、飯盛塚の子どもに女大学・習字・算術を教え、天満神社でも女大学・商賣往来・論語など読・書・算が教えられ、倉橋の金福寺・真田万五郎・福井宅でも寺子屋が開業されていたらしいとある。また明治初年には安部地区の郷士（無足人）の子どもで寺子屋教育を経て京都・大阪・津・東京に遊学した奥田源造・高瀬大助・岡橋万造の名前があげられている⁽¹⁶⁾。

葛下郡高田村の堀江宗彰の国学館、同村の堀江清水、三倉堂村の吉阪覺門が文化14年に、田井村の樫園離蓋、曾根村の久林了円、山内村の樫生流念、市場村の平井有藏、野口村の竹園了雲、出村の葛城教生、根成柿村の杉田政七郎が明和4年に男児135名、女兒85名を、同村の松田政七

郎が文化5年に寺子屋を開業し、大日堂の徳善寺で三字経・手習い・四書五経・十八史略を教え、高田村の西嶋勝作（勝右衛門）が嘉永5年に私塾・好文堂を開業して男児55人、女児45人に読書・算術を教えたとある。このうち模園、久林、模生、平井、竹園寺子屋及び西嶋私塾は『史資料』にも把握されている。安永7年(1778)発刊の田中某「狂歌やまと拾遺」によれば「寺子ども まさるたつとき申のとし 木あるをもってかきのぼるなり」なども残されている⁽¹⁷⁾。また天保2年(1832)御所村の五人組帳によれば嘉永6年に686戸の規模の村に「ふでや」（筆や）が1戸、「寺子や」が2戸あった。また寺子屋教科書として「寺子重宝名所文絵入 新撰大和 全」が流布していたことを伝えている⁽¹⁸⁾。さらに高市郡には明治4年ころに松山村に増山半四郎が藩校明倫館跡に寺子屋を、大円寺・西室院・千寿院にて、さらに清水谷村の島村友吉により、また下子島村の橋本磯平、森田半三郎により寺子屋が開業されたとされる⁽¹⁹⁾。山辺郡波多野村において吉田に奥西定七、広瀬に山下、広代村に神谷大学、遅瀬の上村に藤吉という人物が寺子屋を開業し、それぞれ平仮名・姓名・地名・日用文章の読み書きと算術（そろばん、筆算）、童子教・実語教・商賣往来・庭訓往来・和漢三字経から四書五経への読みがなされたとある⁽²⁰⁾。宇陀郡曾爾村には小長尾村に好学の医師井上勘解由・愛之助の父子、今井村に松井萬右衛門（広介であろうか）五代にわたる医師で寺子屋を開業しているものがある。また長野村の岡田家に「文章大成」節用辞典類などがあり、植田家には「絵入 商賣往来」「百姓往来」があり、長野村・塩井村・伊賀見村・山粕村に国典・漢籍書類が多数あることを伝えている⁽²¹⁾。同じ山辺郡都祁村にも来迎寺、地藏院、念仏院、青竜寺、安楽寺、安穩寺と相河村大西家など針以南の地域に多くの寺子屋が開業された。また馬場の谷奥家、下深川の水瀬に私塾が開業され、白石村の吉井本家には奈良より漢学者の春日忠潤をむかえて十八史略、国史略、四書など授けられ、友田村の久保虎三家においても明治18年に有意学舎が設置され篤学の青年に夜学の私塾が開業されたとある。蘭生村の青竜村寺子屋では名張付近の滝の原村の漢方医吉村養順が長男玄竜をつれてこの寺に移住し寺子屋を始めたとある。男児7～8名、女児3名、夜学に10名程通って、手習いは平仮名、数字、村名、人名、大和郡名から商賣往来へ、最初は半紙1枚に4字、次に6字、次に三行、次いで四行16字と細字にすすみ5日に一度訂正されたという。読み方は三字教、実語教、四書であり算盤も習ったとある。また女児にはお針、木綿織も教えられた。僧侶師匠の妻が教えたのであろう⁽²²⁾。

また平群郡斑鳩に古代の学問所として聖徳太子の根本道場「鵜学問所」と「勸学院」が設立され、近世には法隆寺福井町にある福井筆学所において侍野昌立（平次郎）が童子教・大学の読みと地名・証書類の手習いを教えていたとある。この筆学所へ斑鳩の本町・神南・新家・岡本・満願寺・市場・川合・西宮・保田・山田の各地域から子どもが通った事、庶民の手習所が「筆学所」と呼ばれ、慶応元年に侍野昌立没後には長女の侍野鹿野が継承したとある。そして記録類としては「天保十一年歳子四月吉日 手習児屋世話人 普請買物帳」及び明和8年(1771)の大硯が残され、寺子屋ではなく「手習児屋」と呼ばれていたことを伝えている⁽²³⁾。

2. 乙竹岩造『日本庶民教育史』所収の「奈良県」の庶民教育

乙竹の『日本庶民教育史』は石川謙『日本庶民教育史』と並ぶ1929年に発刊された庶民教育史研究の先駆的な業績である。この著書の特色は大正4年から6年にかけて3,000人余の古老に東京高等師範生、高等女子師範生、各府県の男女師範生の最上級生により直接聞き取り調査をしてその結果を分析し、幕末寺子屋の実態について「第五篇 隆盛期庶民教育の地方別調査」として報告されているものである。大正初年の古老といえ幕末に子ども時代であったという直接体験

を聞き取った記録であり、奈良県の場合、男36人、女14人合計50人の古老から聞き取って調査を加え、天保中期から明治初年にかけての具体性に富む子どもの学習実態が述べられている。

経営者は庶民、僧侶が多く、次いで武士、神官、医師、浪人の順序であることは『史資料』でもみたが、身分や職種からみて高取藩の家老、森川源平による寺子屋開業、三輪大明神神官越氏父子二代の開業、庄屋・名主など村役人による開業以外にも陰陽師、易者、筆墨商人、講師など多様であったようである。規模もまた多様で町には比較的大きな寺子屋が開業されていた。添上郡三条東町の藤本退蔵（易者）寺子屋は300人、高市郡今井町の小房稲村寺子屋は350人規模であったという。寺子屋開業は山間僻地にいたるまで普及していたが、多くは小規模で寺院・空き家を使用していたが、吉野郡下市町などの宿駅では弘化期で5～6の開業がみられた。「寺子屋」の呼び方も多様であり奈良町あたりでは「あぜちや」「あじちや」などと称され、「阿字知屋」と当て字で書かれたりした。乙竹によれば「あぜちや」とは「庵室」の意味という。寺子屋は男女児併せた施設が多く男女児ともに8歳から就学することが多かった。しかし就学状況はさほど高くはなかったが平均すれば男児は5年、女児は3年程であった。学習の時間はおよそ午前8時頃に始められ、午後4時ころに終了して日中に行われたが、僅かながら朝習、夜学、丁稚むけに特別に開業されるなど行われたりしたことは特筆されよう。休日は特定の日、正月、盆、節句、祭日、大暑、極寒、年末年始、農繁期などであったという。科目は読書・算術あるいは読書・習字であることは『史資料』からも述べたが、それに謡曲・修身・茶花などを加えられることはあったが、読書が重んぜられたことは確かである。教科書として多い順に実語教、童子教、四書五経、庭訓往来、女大学、商賈往来、今川状、百人一首、腰越状、弁慶状、五人組その他の掟類、三字教、国史略、十八史略、百姓往来、百官名、女庭訓往来、諸職往来、経盛返状、文選、義経合状、木曾往来、曾我状、寺子教訓書、状文章、日本外史、唐詩選があげられている。読書が中心であることから漢籍書や古往来物が含まれている。また五人組帳、御条目、十七箇条、奉行人証文類などの掟・証文類も読書の対象であった。習字教材として平仮名、町村郡名、国尽、人名、商賈往来、名頭、証書訴状類、数字、状文章、千字文、庭訓往来、諸職往来、片仮名、升目、百姓往来、百官名、京名所、百人一首、腰越状、今川状、女家訓、御条目、日用器具、武具、屋号、方位、江戸往来、古文孝経など全国傾向と合致するが南都往来・竜田詣・大和名所記など地往来物ともいえるものがない。算術は九九、加減乗除、八算見一などであったとする。方法は個別教授が多く、習字は師匠が手を取って筆法を教えた。またこどもは絵入りの手本を求め購入したなど大坂と似通う。席書は競い書・張り書ともいわれて行われた所が多い。賞罰のうち賞は筆紙墨などを用いることが多く、罰は大抵行われた。留置、竹枝・木片・字突棒または煙管で打つ、線香、棒満、叱責、天井に釣り上げる、直立、罰課、点灸、静座、算盤を捧げる、掃除、退学などであったという。座席は男女別席が多かった。また五節句には特別な催しがなされ正月の書初、左義長にこれを焼く、郡山では七夕に西瓜・大角豆を持参しての星祭り、吉野では七夕踊りがなされたという。また天神講・文殊講がおこなわれ菅神画像の前で天神経・心経を唱読したり、文殊堂に参詣したりした。寺子の遊びは角力、手毬突、鬼遊、隠鬼、駆足、ことろことろ、豆弾き、剣術のまね事、綱引、戦遊、お客遊、芝居の真似、山滑り、河飛び、弓、姫籠などであった。師匠はおよそ近郷の庶民から尊敬される「有識有徳」の人物が多く、寺子や父母からも尊敬されていた。束修は銭・菓子・日用雑品・米・赤飯・餅が持参され、謝儀として銭は年額10匁ほど、その他日用雑品・餅・米・麦・菓子・酒などであった。また炭料・畳料を取めた所もある。庶民教育への藩の関わりは全体として自由にまかされていた。なかでも郡山藩では庶民の家塾・寺子屋の開業

は自由とされたが、藩士の寺子屋開業は届け出させ、隔月ごとに藩士子弟のみを藩学校に招集し、試験を試みて優秀者には筆墨などを賞与するなど、やや積極的な奨励が行われている。芝村藩では苗字帯刀御免の身分でも志願者には里正の申し立てを経て藩学への入学が許可され、功績ある寺子屋師匠は褒賞の対象とされた。

III 寺子屋の教科書「往来物」の検討

寺子屋でも最も頻繁に手本とされ流布していた「商賣往来」（史料8）の内容をみる。商売で取り扱う「文字、員数、取扱乃日記、証文、注文、請取、質入、算用帳、目録、仕切乃覚」などの商売用語、両替の金子として「大判、小判、壹歩・貳朱」の名称、金は品位が高く、「銀子、豆板、灰吹」の種類と贋と本物を区分けでき「貫目分厘毛佛」まで知り、天秤分銅で間違いなく割符し売買できることとした。また雑穀類の梗、糯など16種類の名称、「廻船数艘積登間屋之蔵入置」など値段や相場を聞き合わせて売り払う時は「運賃、水上、口銭」を差し引いて利潤を考えて「出入損失」をわきまえて商売するべしとしている。この外、絹布類として「金襴、縹子、純子、紗綾、縮緬、綸子、羽二重、北絹、生絹」の絹物名称と

表(8) 寺子屋教科書「商賣往来」の内容



奈良教育大学図書館所蔵「商賣往来」の「絹布乃類」の部分

「天鷲絨、羅紗、猩々緋、羅背板、毛氈」の毛物の名称、兜羅綿・紬など木綿織物の名称と羽織・袴など着物に関する名称、風呂敷、手拭、帯、頭巾など生活衣類に関する名称など41種類あげられている。また染色の色として「紺、花色、浅黄」など12種類の名称と染め入れる柄模様として「縫散、立浪、籬之菊、雪折笹、御所車、澤潟、水車、地扇、菱、輪違、九曜、四目結、巴、菊、桐、柏、藤、蔦、唐草」など19種類の「女、童」が好む模様が上げられている。武士の用具類は其の品多く、「弓、矢、鉄砲」をはじめとする20種の道具名称があげられ刀や脇差の拵えぶりの名称として目貫、鮫縁など好みによる「赤銅、象眼」など6種があげられ拵えや彫物、細工は地域や時の風俗に應ずるべしとした。また唐物・和物の家財や道具類として「珊瑚、瑠璃、瑪瑙、琥珀」などの装飾品及び硯箱、文庫、筆架などの家具調度品の26種の名称、次いで雑具として「葛簞、狹箱、櫃、長持、弁当、重箱、茶碗、盥、傘」など衣食住に関わる46種類の日常の生活調度品の名称がならべられ、高値・低値は時と所を見合わせて売買をなすべしとする。次に薬種・香具類の類として「檳榔子、大黃、沈香、人參」などの薬草と香具の名称41種、「練・粉・散・膏」薬の4種の商品化された薬の形の呼び方などが並べられ、全く贋薬種を用いないこと、量入れは正直を第一とすることが述べられる。其の外には山海の魚鳥の名前として「鶴、雉子」などの鳥の名前11種、「鯛、鯉、鮒」など魚類及び「鯛、松魚節」などの干物類など33種類あげられ諸国の名物の名前は際限ないので省略するとある。これらの品々の名前は「初学之童、平生可取扱文字」を思い出すまま筆を走らせたとある。そして最後に、そもそも商売の家に生まれたならば、幼い時からまず「手跡算術執行可為肝要也」として手習い・算術を必らず習得することが肝要であり、次いで「歌、連歌、俳諧、立花、蹴鞠、茶湯、謡、舞、鼓、太鼓、笛、琵琶、琴」など稽古の類は「家業有餘力者、折々心掛可相嗜」もので「碁、将棋、双六、小唄、三弦」など酒宴や遊興に長じたり、泉水、築山、樹木など分限不

相応に衣服家宅に金銭を費やすのは無益の事、衰微破滅の基である。すべて見世棚を奇麗にして、挨拶、応答、饗応も柔和に為すべきで、大いに高利を貪り、人の目を掠めるは大罰を被り、重ねて買い物に来てくれるは稀である。このような「天道之働」きを恐れる者には、ついに「富貴繁盛、子孫栄花」があらわれ利潤も倍々になることは間違いないとして商人道を説いて締めくくられている⁽²⁵⁾。

「商賣往来」が商人子弟を対象としていたものから、広く農民のこども一般に流布したのはこのような、やさしい内容と生活必需品の知識と少しの娯楽に関する知識を簡潔明瞭な内容で作成された事にあるといえる。また出版事情からいえば手堅い刊行物とされ、広範な読者層をもつ商品として京都・大阪・江戸の三都の大手の書林のみならず諸国の書林も発刊にとりくんだので全国に普及したのである。

おわりに

幕末の大和地域の庶民教育の実態の概要を『史資料』による寺子屋・私塾の統計一覧に把握された内容と、奈良県下に発刊された地方史誌類を手がかりにして、『史資料』を補いながらできるだけ実態の概要把握に努めた。幕末の大和地域は全国の動向に対応して庶民の学習熱が高揚し、子どもの学習文化への関心の高まりがみられる。寺子屋や私塾の開業も『史資料』にある311を凌駕した数が展開していたことが予測される。僧侶などの師匠に手ほどきをされながら男女児30人ほどの比較的小規模の寺子屋で仮名、人名、国名などの単語や往来物による読みと手習い、算術の稽古と孝経などの素読、心経・阿弥陀経の暗誦などを大声で習う子どもの生活風景がある。大和地域も幕末には大和の多くの村にも1～2ヶ所ほど寺子屋が開業され、「筆学所」「手習児屋」「あぜちや」など多様な呼び方がされていた。また大和の地域の教科書は読書中心のテキスト類が多かったが、手習用にも使用された往来物が広く流布し、例えば「商賣往来」などが生活に即した内容のため頻繁に学習されていたようである。

注

- (1) 文部省編『日本教育史資料』第八巻には各府県から報告された寺子屋・私塾について、名称・学科・旧管轄・所在地・開業年代・廃業年代・教師数(男女別)・生徒数(男女別)・調査年代・師匠身分・習字師匠氏名が統計的な一覧表としてまとめられている。
- (2) 日本教育史資料研究会(名倉英三郎代表)により『日本教育史資料』の史料批判がなされている。現在は藩の学制・学校・儒者などを中心に各府県により取り調べられた「取調書」と在地の各藩主に依頼して収集された藩学校の「抄書控」とつきあわせて、『史資料』掲載の史料批判が行われている。全国の寺子屋・私塾の史料批判には至っていないが、近年に取り上げられるであろう。
- (3) 川崎喜久男「寺子屋の普及についての若干の考察―房総における」(川村先生還暦記念会編『近世の村と町』1988年)及び『筆子塚研究』(1992年)においても指摘されている。拙著『日本近世民衆教育史研究』(1991年10月)でもふれた。また木村政伸「幕末期筑後の農村における寺子屋の急増と村役人層」(九州大学教育学部紀要『教育学部門第34集別冊』1989年3月発刊も参照
- (4) たとえば世田ヶ谷区教育委員会編『世田ヶ谷区教育史』資料編(一)～(六)(昭和63年3月31日)が発刊された。『世田ヶ谷区教育史』資料編(一)では「教育史を明治五年の『学制』を起点とする『百年史』的発想から考えるのをやめ、近代的な学校制度が樹立される以前の江戸時代の村の教育から近代的教育へどう展開するのかという視点をもった方が、今日の教育の問題が見通せるのではない

かということとなりー（中略）ー教育史編纂に大きな意欲を燃やすこととなったのである。」とのべてあり、その基本的合意の上での世田ヶ谷区域の教育資料編の編纂事業がなされている。幕末から近代に至る教育を把握する視点として筆者も同意している。

- (5) 津田秀夫・石川松太郎監修『都道府県教育史シリーズ』全47巻（思文閣出版）では「本シリーズは各地域における教育の実態を日本史全般の流れのなかで歴史的に把握する」として、通史の体裁をとりながらも全体の比重を近世にかけ、6～7割を近世の叙述にあてている。また「地域の特色ある教育を紹介」する場合、「寺子屋、郷学、私塾、藩校等の教育機関にとどまらず芸能を含めた社会教育、宗教教育、障害者教育、産業教育」など「教育的側面をもつものの活動、その形態」も取りあげるとしている。藩校、寺子屋、私塾などの教育機関をとりあげた場合は、その「機関を成立させた歴史的条件、地域的諸条件」にもふれる事とし、あくまでも「教育的なものの事実を明らかにしながら、歴史の全体像の中で、その教育の地位、役割、意味を考察する」としている。従って「『学制』以後の近代教育史については学校の歴史を中心にしながら教育全般の流れを記述するにとどめる」として、近代以後の教育史叙述は2割の比重である。
- (6) 八嶽友広「近世民衆の識字をめぐる諸問題」（日本教育史研究会編『日本教育史研究』12号1993年8月）、八嶽は1994年5月29日歴史学研究会大会（近世史部会）で「近世民衆の文字学習と主体形成」を報告し、大会報告集『増補 歴史学研究』（1994年11月号）に報告要旨と討論内容が掲載されている。
- (7) 文部省編『日本教育史資料』（一）所収の「緒言」には、『日本教育史資料』の編纂意図が述べられている。明治23年文部省総務局長 辻新次によれば「明治一六年報告局ニ命スルニ本邦教育史編纂ノ事ヲ以テシ先ス資料ノ蒐集ニ著手セシメ同年二月各府県ニ達シ府県廳及ヒ学校等所蔵ノ旧記其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リテ学制頒布前ニ係ル学事ノ諸項ヲ調査セシメ又諸官衙及ヒ旧藩主等ニ照会シ其貯蔵ノ旧記ヲ借覧スルヲ約シ苟モ古来我カ邦ノ教育ニ係ル書ハ細大擇ハス之ヲ蒐集シ以テ此資料ニ供セントセリ」とあり、文部省が明治16年2月、日本教育史編纂のために各府県に命じ、各府県庁及び学校所蔵の旧記録を借用・蒐集し、幕藩時代の儒者の日記類や古老からの聞き取りにより「学制」頒布以前の学事の状態を調査し、旧藩役所及び旧藩主に照会して所蔵史資料を借用して、日本古来からの教育に係わる書籍・史資料をくまなく蒐集しようとしていた。明治維新以後の粉塵まだ癒えない時期に、このような調査に着手したことは、廃藩置県の際の旧藩書類の散逸が甚だしく、明治13年前後ころ、3年程で各府県から進達された調査書が200部以上に達したものと、各府県を通じて旧藩主の旧所蔵資料を併せれば各藩の廃藩置県前後の書類の散逸をくい止め、資料として保存し、本邦教育史編纂資料にできると判断したものである。そして諸藩の部から発刊したのが『日本教育史資料』である。
- (8) 奈良県・斎藤美澄『大和志料（上）』（昭和45年11月30日発刊）、同『大和志料（下）』（昭和45年12月15日発刊）は、奈良県大神神社宮司斎藤美澄が奈良県知事小牧昌業の委嘱により、明治23年～明治27年に著した大和国地誌である。大正3年（1914）奈良県教育会から刊行されているが、昭和45年に歴史図書社が復刻した。古代から明治初年までの大和国内各郡別の村里・山川・城堡・神社・仏寺・旧蹟・陵墓に分類されている。大和国各郡とは添上郡・添下郡・平群郡・山邊郡の四郡（現在の奈良市、大和郡山市、天理市、生駒市、添上郡、生駒郡、山邊郡であり上巻に掲載）と式上郡・式下郡・上市郡・廣瀬郡・葛下郡・葛上郡・忍海郡・高市郡・宇陀郡・宇智郡・吉野郡（現在の橿原市、桜井市、大和高田市、御所市、五条市、香芝市、磯城郡、北葛城郡、高市郡、宇陀郡、吉野郡であり下巻に掲載）の11郡で併せて大和国15郡である。その各郡の村里項目には15郡各郡ごとの町村数と町村名、及び元禄15年『大和国郷帳』による村名・石高・領主名が記載されている。
- (9) 『奈良県史』昭和60年3月25日刊行（名著出版社）の内容は以下の通りである。第1巻ー地理（地域史・景観）、第2巻ー動物・植物、第3巻ー考古、第4巻ー条里制、第5巻ー神社、第6巻ー寺院、第7巻ー石造美術、第8巻ー（欠）、第9巻ー文学、第10巻ー荘園、第11巻ー大和武士、第12巻ー民俗（上）、第13巻ー民俗（下）、第14巻ー地名伝承の研究、第15巻ー美術工芸、第16巻ー金石文、第17巻ー金石文

- (10) 野村知男「奈良県下の藩立学校教育の実情－近代学校成立史研究(14)」近畿大学教職教育部編『教育論叢』第5巻第2号 1994年
- (11) 樗根逸子「近世寺子屋の研究－人和国葛下群王寺村『大章堂』の門人帳を中心とした考察－」1989年度(1990年3月)三重大学人文学部文化学科日本文化コース(86-020番)卒業論文
- (12) 奈良県立図書館郷土資料室発刊『郷土資料室速報 奈良県の県史・郡史・市町村史類刊行状況一覧』(1994年6月1日現在)、奈良教育大学名誉教授木村博一先生よりご教示いただいた。
- (13) 『五條市史』上巻 681-683頁 昭和33年11月3日発刊
- (14) 桜井市立図書館所蔵『大三輪町史』昭和34年5月3日初版、昭和63年1月10日復刊(臨川書店)393頁
- (15) 桜井市立図書館所蔵、桜井町史編集委員会編『桜井町史』 昭和29年9月10日発刊
- (16) 桜井市立図書館所蔵、『桜井町史 続』昭和32年2月10日発刊
- (17) 『改訂 大和高田市史』前編 昭和57年発刊
- (18) 『御所市史』昭和40年3月10日発刊 171～174頁
- (19) 『高取町史』昭和39年4月1日発刊
- (20) 『波多野村史』昭和37年5月15日発刊
- (21) 『曾爾村史』昭和47年11月25日発刊
- (22) 『都祁村史』昭和60年9月1日発刊
- (23) 『斑鳩町史』本編 昭和54年1月30日発刊
- (24) 乙竹岩造『日本庶民教育史』下巻 358～373頁 1929年9月発刊
- (25) 奈良教育大学図書館所蔵「商賈往来」及び国書刊行会編『続々群書類従 第十』昭和44年11月29日発刊 734～735頁

The Actual Circumstances of the People Education in Yamato Area Case Studies of Terakoya and Shijuku

Kayo UMEMURA

(Department of Pedagogy, Nara University of Education, Nara 630, Japan)

(Received April 28, 1995)

This study attempts to understand about the outline of people education in Yamato area.

First, the places where Terakoya and Shijuku were in Yamato area, the number, the teacher's attributes, the contents of education and the pupils are surveyed based on "Material of Japanese History of Education".

Second, the materials for people education, such as those historical books were published in Nara Prefecture, and the investigation into the actual condition in Nara district by Iwazou Ototake are taken up, and are valued.

Finally, the textbooks of Terakoya were "Ouraimono", of which the most popular textbook was "Syoubai-Ourai". The contents of "Syoubai-Ourai" are explained to be of practical use.